

【平成 17 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：穴戸 洲美	担当科目名：学校保健Ⅱ
----------	-------------

1. 授業評価について

- (1) 意義：学生の授業に対する、様々な面が客観的に判断できるので有効である。
- (2) 活用：今後の授業内容や進め方を考える上で参考にする。
- (3) フィードバック：授業の中で、特に学生の評価から問題になった点を、学生に確認しながら授業を再構築していく。

2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：専門が異なったり、授業形態がちがったりすると評価しにくいので、この方法でよいのか検討したい。評価者によって評価が違いすぎるのは客観性が弱いという問題があるからではないか。
- (2) 活用：参考なる意見もあったので、活用する。

3. 自己評価点 (4)

根拠：授業準備には時間をかけている。様々なレベルの学生に分かるよう資料や授業の進め方を工夫している。授業の中で学生からの質問や要求にできるだけ応えるように努力している。大事なところは、学生に質問したり小レポートを書かせ、理解度を見ている。これらの結果、学生から生の声で授業への評価も聞いている。今回の学生の評定平均 4.1 相互評価平均 4.8 であった。

4. 教育指導上の工夫について

学生の学習意欲や理解度にかかなりの格差があり、どのように授業を進めるか工夫が必要である。授業の中で主体的に考えたり活動したりする課題を盛り込み、全員が取り組むような工夫をしている。

視聴覚教材やプリントなどを有効に使い、講義だけではなく実際に活動がイメージできるように工夫している。

授業の質に対し、個別に指導時間を設けたり学生の相談にのるようにしている。

・教職に関する専門科目は、一クラスの人数を 50 名程度にしてほしい。かなり丁寧にしていけないと力がかからない。

・学力格差が大きく、演習やグループ研究をやらせたと一緒に活動できない学生が出てきている。あまり望ましくはないが、学力でクラスを分けることも必要。やる気のある学生が意欲をなくしたり、特に大学として養護教諭の採用試験合格者を挙げていくことも大切であり、少数精鋭もやむを得ないのではないか。

40 番教室は視聴覚機器を使うと黒板がまったく使えず、しかも座席も目いっぱいである。ピアノを動かして移動黒板が使えるようにして欲しい。

【平成 18 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：穴戸 洲美	担当科目名：看護学Ⅲ
----------	------------

1. 授業評価について

- (1) 意義：学生の評価を受けることは自己の授業を見直すために役立つ。しかし、学生側は必ずしも教員の意図するところをしっかりと受け止めてはいる部分も有り、一考を要す。

- (2) 活用：評価の項目によっては、今後の授業改善に役立てることができるものもあり生かしていきたい。
- (3) フィードバック：学生に公表し、さらに学生の意見も聞いた上で今後の授業の方法や教材の研究に役だてたい。

2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：お互いの専門がことなるので、何をどう評価するかということが問題になるが、学生指導の方法では学びあうことができる。また、他の教員の授業をみることも参考になる。
- (2) 活用：「実習させるには人数が多すぎる」という評価があり、授業方法等については次年度評価を生かし工夫していきたい。

3. 自己評価点 (3)

根拠：教員の評価は平均すると 4.6 であったが、学生の理解度をみるとさらに工夫の必要がある。

4. 教育指導上の工夫について

前半が講義、後半が実習という形態をとった。講義では学生の興味や関心を高め、集中力を持続させるために、グループ学習、理解度調査などを入れて、一方的な講義にならないように工夫した。

しかし、この授業を必修で受ける学生と選択の学生が混在していて、解剖学や看護学Ⅰなどの基礎科目を履修している学生としていない学生の知識の差があり、できるだけ授業の中で補いながら進めていったが学生の不満も聞かれた。

後半の実習は学生は大変意欲的にやっていたが、50 名を実習させるには教室が狭すぎる、一人ひとりを丁寧にフォローするには時間がかかりすぎるなど不都合な点が多々あった。

今後この形態であれば実習はかなり難しいので、ビデオ等の活用による方法もやむを得ないと思う。

できれば、必修科目として受講する学生と選択科目として受講する学生はクラス分けをすることが望ましい。

【平成 19 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：穴戸 洲美	担当科目名：養護概説
----------	------------

1. 授業評価について

- (1) 意義：学生の評価を受けることは自己の授業を見直すために役立つ。しかし、学生側は必ずしも教員の意図するところをしっかりと受け止めてはいる部分も有り、一考を要す。
- (2) 活用：評価の項目によっては、今後の授業改善に役立てることができるものもあり生かしていきたい。
- (3) フィードバック：学生に公表し、さらに学生の意見も聞いた上で今後の授業の方法や教材の研究に役だてたい。

2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：お互いの専門がことなるので、何をどう評価するかということが問題になるが、学生指導の方法では学びあうことができる。また、他の教員の授業をみることも参考になる。
- (2) 活用：「養護教諭になることを目的としない学生」がしばしば授業に集中できないので、今後のクラス編成を考えると参考にする。

3. 自己評価点 (3)

根拠：教員の評価は平均すると 4.6 であったが、学生の理解度をみるとさらに工夫の必要がある。

4. 教育指導上の工夫について

一方的な講義ではなく、学生との質疑や具体的な活動を入れるという形態をとった。また、学生の興味や関心を高め、集中力を持続させるために、グループ学習、理解度調査などを入れて、単調な授業にならないように工夫した。

しかし、養護教諭になりたい学生と免許を取ることを目的とする学生が混在していて、学生に意欲に大きな差があり、一生懸命やる学生の不満も聞かれた。

また、意欲だけでなく知識の差も大きくそれを埋めるための工夫が必要だと感じた。

意欲的に学びたい学生にはできるだけ個別の指導ができるようなチャンスをつくり働きかけた。

【平成 20 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：宍戸 洲美	担当科目名：看護学Ⅲ(学校救急看護学)
----------	---------------------

1. 授業評価について

- (1) 意義：学生の評価を受けることは自己の授業を見直すために役立つ。しかし、学生側は必ずしも教員の意図するところをしっかりと受け止めてはいない部分もあり、一考を要す。
- (2) 活用：評価の項目によっては、今後の授業改善に役立てることができるものもあり生かしていきたい。
- (3) フィードバック：学生に公表し、さらに学生の意見も聞いた上で今後の授業の方法や教材の研究に役だてたい。

2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：お互いの専門がことなるので、何をどう評価するかということが問題になるが、学生指導の方法では学びあうことができる。また、他の教員の授業をみることも参考になる。
- (2) 活用：「養護教諭になることを目的としない学生」もこの授業では集中し、よく取り組んだが、学力の差は大きく、今後の授業を進める時に参考にする。

3. 自己評価点 (4)

根拠：学生による教員の評価は平均すると 4.6 であったが、学生の理解度をみるとさらに工夫の必要がある。

4. 教育指導上の工夫について

一方的な講義ではなく、学生との質疑や具体的な活動を入れるという形態をとった。

また、この教科の特徴として前半講義、後半を実技にあてた。ほとんどの学生が興味や関心をもち、よく集中して取り組んだ。また、授業以外にも実技の練習をする学生もいて、意欲的に学んでいた。また、意欲だけでなく知識の差も大きくそれを埋めるための工夫が必要だと感じた。

意欲的に学びたい学生にはできるだけ個別の指導ができるようなチャンスをつくり働きかけた。

できれば実習室等が整備されるとさらに学びやすい。

【平成 17 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上 憲治	担当科目名：文章表現法
---------	-------------

1. 授業評価について

- (1) 意義：評価について、自分の予想通りであったり、予想に反したりすることがある。学生の立場に立った授業改善を自覚することができる点が有意義である。
- (2) 活用：同一科目を 2 年間 4 期にわたって授業評価に当て、授業

を工夫した進展を見たり、多人数クラスでの授業実践の問題点を自覚したりでき、次の工夫に役立てている。

- (3) フィードバック：評価結果を授業中に口頭で公開し、「もっと良い授業のために」ということについて意見を具体的に書いてもらった。それによって相互に自己確認できた。

2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：適度に緊張し、より整った授業を展開する努力が行われた。また同僚の視点からの意見は貴重で、自分の教授法について新鮮な自覚を得ることがあるように思う。
- (2) 活用：他の授業を参観することは勉強になることが多く、自分の授業法に取り入れるよう心がけた。また相互評価の中でもっと厳しい視点も見、精進を覚悟できた。

3. 自己評価点 (3)

根拠：(後期の評価はまあまあだが、前期のビッグ・クラスではまだまだの感が強い。良い内容が良いクラスを作ると信じて、研鑽したい。)

4. 教育指導上の工夫について

文章表現は短大で学ぶ基礎的スキルとして重要であるし、社会的にも非常に有効なスキルである。そこで本講の目的は「短大授業で必要とされるレポート作成スキル」を身につけるというものである。その内容は 3 つの課題を同時に並行して行われている。

1. レポート作成手順：資料収集、カード作成、論理展開等。
2. 文章作成：分かり易い文章作成。言葉の修飾関係、句読点の打ち方、段落の取り方等
3. 漢字練習：漢字検定 2 級程度を中心に。

3 の漢字練習は漢字検定の練習問題をテストしながら覚えていくシステムである。前回に問題を配付し、翌日に答え合わせをし、集計する。集計結果はフォーラムで公開している。答え合わせは時間節約のためスライドを用いている。これを継続することは予想外に効果をもたらし、学生は漢字学習に意欲を持つ。

2 の文章作成は文法的なことでもあり、敬遠されがちである。そうした印象や複雑さを解除して、分かり易い文章を書くことを簡単にマスターすることを目的としている。テキストは「『日本語の作文技術』本多勝一 朝日文庫」で、この目的に近いものがある。

3 はカード作りを軸に、自分のテーマについての知識や情報を整理する技術を身につけるためのものである。長期的で何工程かを経なければならない作業はレポート作成には欠かせないプロセスであり、高等教養に不可欠なものである。

以上の内容対して学生から添削を要求する声が開こえる。できるだけ機会を設けているが、十分とはいえない。そこで 2 の文章作成の一環として文章添削的な共通問題を出しそれに変えている。個人添削には及ばないまでもある程度の満足を得ていると考える。

【平成 18 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上 憲治	担当科目名：特別活動の指導法
---------	----------------

1. 授業評価について

- (1) 意義：学生は授業者の工夫や努力より、授業者の見逃している盲点を指摘する。授業者としてはこうした盲点を改善しながら、一層良い授業作りができるのだと思う。
- (2) 活用：一方、明らかに見当違いな評価を下す学生もいる。そこに

も授業改善の問題が隠されており、授業を超えた工夫が必要であると考える。

- (3) フィードバック：評価結果を授業中に口頭で公開し、相互に自己確認できた。

2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：日頃の授業作りを同僚に見てもらうことは客観的な視点からの意見を聞けるので有意義である。自分では気付かない点への配慮ができるチャンスになる。また学生にとっても他の先生の参観は学習に刺激を与えると思われる。
- (2) 活用：参観時がグループワークの発表会に当たり、評価方法について疑問を持たれた。学生には事前に説明してあるが、次回からはさらに詳細に説明しようと考えている。

3. 自己評価点 (3)

根拠：ワーク作業・特活の意味や意義・企画力の3点に取り組む演習形式の授業である。総じて狙いどおりであったと言える。一層の質の向上を計りたい。工夫したい。

4. 教育指導上の工夫について

本講義の目的は特別活動について理解し、その指導法を演習するところにある。

- (1) 先ず特別活動の概要をテキストによって理解する。その理解方法は講義形式ではなくワーク形式を主にしている。テキスト中の論文をワークによって分担してまとめ、全体的に報告するシステムである。この際所定の形式で発表用レジメを作成・配付する。各ワークでは担当領域をまとめるために、各個人が幾つかの論文を担当してワークで報告し、まとめて報告する。この際所定の形式によるカードを作成・提出し、発表する。

これによってテキスト全体の概要を個人レベルにまで理解が行き届くようにする。この方法の問題点は、各個人は幾つかの論文をよく理解するが、他の論文については理解が浅いという点である。もちろん他の領域の理解については報告会での報告記録(所定の形式で提出する)を検証し、一定の理解に届いていると判断しているが、今後この点を改善し、他の論文にも目を通すように工夫したい。評価についてはカード・レジメ・報告記録を所定の形式でセットして提出し、評価資料とされる。

第2は特別活動の理解を踏まえて、実際に学校教育における特別活動の企画を立てることを演習で行う。これもグループワークで行うが、企画書を作成し、全体の前でプレゼンを行う。その際プレゼン用のレジメを別に作成・配付して、全体に説明する。各自はその発表を記録し、その評価をして提出する。現在の問題点は「企画論」について詳細に説明できていない点にあり、今後補充していく所存である。評価については企画書・レジメ・報告記録を所定の形式でセットして提出し、評価資料とされる。

成績は以上2者の資料を各個人に還元し、総合的に評価する。

【平成19年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上 憲治 担当科目名：特別活動の指導法

1. 授業評価について

- (1) 意義：この授業を授業評価の対象にして2回目である。今回はテキストを変えて、前回と同様なワークショップ方式で実施した結果、「授業の内容が理解できた」は3.15→3.27となり、「この

授業は役に立つと思う」は3.65→3.95でポイントは増えている。こうした比較で授業改善効果を見られることは有益である。

- (2) 活用：上記内容に含む

- (3) フィードバック：評価結果を棒グラフにして学生に報告した。

2. 自己評価点 (3.7)

根拠：(授業の事前説明をもう少し学生に歩み寄って、分り易くなるよう工夫をしたいと考えている。)

3. 教育指導上の工夫について

1. 先ずテキストを変え、学生が分かり安くなるようにしてみた。
2. 次に授業全過程をワークショップで実施しているが、作業をしない学生がないように各学生に作業が行き渡るよう、作業分担させている。またグループで各自の作業を報告し合い、グループで共有するようにさせている。これらの作業過程はすべて記録として残るように資料化している。
3. グループでの個人作業はグループでまとめ、グループで一つの報告書を作成させるが、この報告書作成担当者について配慮しなければならないと現在考えている。つまりまとめについても誰かに任せきりで作業に加わらない学生が出ないようにするためである。
4. このレポート及び発表はパワーポインターを使ってさせている。これは情報教育との連携である。大変成果を上げた授業担当者は評価している。この制作や、発表担当者についても仕事の偏りや、学習成果に結びつかない者が出ないように工夫することが今後の課題である。
5. 発表における課題は、大変よい発表をする発表者もいるが、寂然としない発表者もいる。もう少し高いレベルまで引き上げられるのが望ましいと思う。今後は発表態度や内容の準備にも十分配慮していきたい。
6. 最後に筆記試験によって、知識理解度をテストしたが、こうしたワークショップによって、効果があり、取得点は優秀である。

【平成20年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上 憲治 担当科目名：特別活動の指導法

1. 授業評価について

- (1) 意義：この授業を授業評価の対象にして2回目である。今回はテキストを変えて、前回と同様なワークショップ方式で実施した結果、「授業の内容が理解できた」は3.15→3.27となり、「この授業は役に立つと思う」は3.65→3.95でポイントは増えている。こうした比較で授業改善効果を見られることは有益である。

- (2) 活用：上記内容に含む

- (3) フィードバック：評価結果を棒グラフにして学生に報告した。

2. 自己評価点 (3.7)

根拠：(授業の事前説明をもう少し学生に歩み寄って、分り易くなるよう工夫をしたいと考えている。)

3. 教育指導上の工夫について

1. 昨年度に引き続きテキストを変え、新しい内容でグループワークに合うものにした。
2. 今年度のグループワークの基本は学生が自ら学ぶ方法を工夫した。学習の基本を自己学習に置き、教師はその環境づ

りに努めた。学生の学びの状況を見ながら適切な援助を
与える状況対応をたえず配慮することが肝心である。

3. そうした環境下で学生は学生指導を受けながら学生指導の
ノウハウを経験的に洞察したり、無意識のうちに身につけ
たりできる。そのためには授業全体の予測的流れを明確に
提示し、節目ごとにグッズ的な教材を与えてリードしてい
くことが有効である。
4. 学生の混乱が見られるときは大概上記の配慮が行き届いて
いないことが多い。これを洞察して速やかに対処すること
が重要である。しかしこうしたことが思わぬ効果を生むこ
ともあった。学習が進んでいる状況では学生はその混乱を
自ら乗り越えようとする。その模索のピーク時に教員から
解決となる教材を与えられると、「教師は適時に手を差し伸
べてやるのが大切だ」と感じる事ができた学生がいた
(アンケート調査で判明)。
5. 今年度の内容は2ステップで編成した。1つは特別活動の理
解である。学生のグループごとにテキストを理解しあうワー
クショップを設定し、グループでの共通理解をまとめさせ、
プレゼンテーションの機会を設けた。
次に、特別活動の企画をグループ毎に実施した。今回の
工夫は、所定の形式を配布してスケジュール表を作成させ
たことである。学校全体やクラス別の年間行事や時間的予
定の中で、計画する特別活動のスケジュールを立てたので
ある。その結果昨年度より資料内容に充実が見られた。
6. このプレゼンテーションも実施した。レジメの提出期限や
提出形式を守るなど準備は第1回の時より進歩した。プレ
ゼンテーションも大変すばらしいものが2つほど見られた。
7. 総合的に見ると、情報教育との連携に負うところが大きい。
また中には取り組みが熱心でない学生もおり、今後対策を
とりたいと考えている。

【平成 17 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：平池 秀和 担当科目名：臨床栄養学 I

1. 授業評価について

- (1) 意義：学生の授業に対する、思いなど様々な面が客観的に判断で
きるが、学生に媚びてはいけなと思う。上手に説明して解った
様な錯覚に落ちてはいけな。授業で聞いた内容は判っても、そ
れを理解するのは自分一人になってその内容を理解し納得し、自
分の心に響くことが大切である。
- (2) 活用：今後の講義方法を模索する材料となった。
- (3) フィードバック：視聴覚機器をもっと利用したいと感じた。

2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：順序だった理解が無ければ、ますます判らなく内容の講
義と、基礎知識なく何処からでも聞くことのできる講義とでは、
講義の方法が根本から異なる。種々の講義を参考にできた。
- (2) 活用：異なった方面からの意見で活用したい。

3. 自己評価点 (4)

根拠：最近のエピソードなどを取り入れて、学生の興味が少しでも湧
くように努めている。

4. 教育指導上の工夫について

学生の学習意欲に格差があるので、最近のエピソードなど
を取り入れて、学生の興味が少しでも湧くように努めている。

教科書を読ませると、ほぼどの程度の理解力が推定できる
ので、順番に読ませている。病気の話をして、そこから正常
の生理学をより深く理解できるようにしている。

【平成 18 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：平池 秀和 担当科目名：看護学 II (母子看護)

1. 授業評価について

- (1) 意義：学生の授業に対する、思いなど様々な面が客観的に判断で
きる。妊娠、出産、育児と今後は授業に関係なく、直面する問題
であるので、判ったとか判らなかつたとかという問題ではないと
いう点を学生も充分理解しているようだ。
- (2) 活用：今後の講義方法を模索する材料となった。
- (3) フィードバック：プロジェクターをもっと利用したい。

2. 自己評価点 (4)

根拠：最近のエピソードなどを取り入れて、学生の興味が少しでも湧
くように努めている。

3. 教育指導上の工夫について

出産の場面はどのように理解させるべきか迷うが、絵のよ
うな写真をスキャンして、PowerPointで見せるようにした。
学生の学習意欲に格差があるので、最近のエピソードなどを
取り入れて、学生の興味が少しでも湧くように努めている。
教科書を読ませると、ほぼどの程度の理解力が推定できる
ので、順番に読ませている。
病気の話をして、そこから正常の生理学をより深く理解で
きるようにしている。

【平成 19 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：平池 秀和 担当科目名：臨床栄養学 I

1. 授業評価について

- (1) 意義：「医療的な側面から栄養に触れることができて良かった」
という学生の感想があり、これまでの講義方法で一定の効果があ
ると考えられる。
- (2) 活用：タンパク質、糖質、脂質の基本的な構造を理解させる。
- (3) フィードバック：カラープリントを用いて、構造式などを理解さ
せる。

2. 自己評価点 (4)

根拠：最近のエピソードなどを取り入れて、学生の興味が少しでも湧
くように努めている。

3. 教育指導上の工夫について

正常の生理学から如何にして病気になるのかを理解させる
ことで、臨床的な病理学が理解できるので、生理学がさらに
明確に理解できるようになる。

【平成 20 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：平池 秀和 担当科目名：乳児保育

1. 授業評価について

- (1) 意義：「子どもの病気のことがよくわかって、よかったです」と
いう学生の返事が多かった。「楽しかった」という意見も何人か
あり、興味をもってもらえた。
- (2) 活用：教科書だけでは、物足りないようなので、副読本を考えたい。

(3) フィードバック：来年からは「定本育児の百科、松田道雄著」を将来のためにも読ませたい。

2. 自己評価点 (4)

根拠：最近のエピソードなどを取り入れて、学生の興味が少しでも湧くように努めている。

3. 教育指導上の工夫について

正常の生理学から如何にして病気になるのかを理解させることで、臨床的な病理学が理解できるので、生理学がさらに明確に理解できるようになる。